

家のはなし (海外の住宅事情) ～その 5～

家のはなしを続けます。今回はベルリンの住居です。

ドイツへの赴任

ギリシャから帰国後、目黒区東山にあった築 40 年、67 m²という猫の額ほどの国家公務員住宅に 8 か月ほど住んだ後、横浜市にマンションを購入して転居。マンションの広さは約 100 m²でギリシャの住居と比べれば大幅なダウンサイジングでしたが、サラリーマンが入手できる都心通勤圏のマンションとしてはそこそこの広さということで妥協し、現在もこのマンションに住んでいます。

霞が関で 3 年間の勤務を経て、3 サイクル目の海外赴任となったのは 2008 年 8 月でした。7 か所目の在勤地は、それまで全くなじみのなかったドイツ語圏のベルリン。自宅マンションを空き家のままにして、一家 4 人での赴任となりました。

ベルリンは人口 350 万を超えるドイツ最大の都市です。町の構成ですが、かつてはいわゆる「ベルリンの壁」が 1961 年に建設されて以降は、町の中心に位置するブランデンブルク門から左右に伸びる壁を境に旧西ベルリンと旧東ベルリンに隔てられていましたが、1989 年の壁崩壊とともに東西の境界は消滅。その後程なくして東西ドイツは統合、以後 20 年以上にわたり旧東ドイツのインフラ整備に莫大な資金が注ぎ込まれてきました。特に、ベルリンでは旧東ベルリン地区を中心に再開発が急ピッチで進められ、一時期は世界中のクレーン車がベルリンに集まっていると言われたほど、あちこちで大規模な再開発が行われてきました。

東西統一後のドイツが、首都機能をボンからベルリンに移転開始したのが 1998 年、完了は 2001 年でした。首都移転に伴い日本大使館も 1999 年にボンからベルリンに移転しましたが、それまでベルリン市には西ベルリン側に総領事館が、旧東ドイツの首都であった東ベルリンには在東ドイツ大使館が設置されていたので、首都移転後の新たな日本大使館は 3 つの公館が合体してできた大所帯でした。大使館の場所は、市内中心部のポツダム広場から徒歩 10 分ほどのティアガルテン公園に近接した戦前の旧日本大使館跡地にあり、第三帝国様式とも呼ばれた戦前の建物を大規模改修した大使公邸、

及び新たに建設した大使館事務所から構成されていました。近隣には、多数の大使館が点在しており、さながら大使館街の様相を呈しています。また、世界で最も有名なオーケストラの一つであるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の黄色い外観で有名なコンサートホールは日本大使館から徒歩 5 分ほどの地点にあります。大使館正門が面する通り名は、ヒロシマ通り (Hiroshimastraße) ですが、これはかつて別の通り名であった道路名について、第二次世界大戦で原爆が投下された広島市に連帯感を表すために、同地区を管轄するベルリン市ミッテ区議会が決議して名称を変更し、ヒロシマ通りと命名したものとされています。

「アルトバウ」と「ノイバウ」

ベルリンでの住居探しも不動産会社による仲介。大使館では、専任の現地職員が新任館員の住居探しをサポートする体制ができており、物件の内覧には現地職員が同行してくれましたので、現地の慣習等で分からない時も職員が間に入って説明してくれましたので、不動産会社との交渉でも困ることはなく、助かりました。

20 軒ほど物件を内覧しましたが、何軒か見ているうちに築年数が 50~60 年以上経っているかそれ以下かによって明らかに住居の造りが異なっていることに気がきました。後日聞いたところでは、一般に築 100 年近い建物が「アルトバウ」で、ドイツ語の“アルト”は“古い”、“バウ”は“建築”を意味します。石造りで天井が 3.5~4m 近くあり、各部屋は広めの造りです。一方、「ノイバウ」は 1960 年代以降に建てられた築年数の比較的新しいコンクリート造りで、天井も 2.5 メートルほど、各部屋はコンパクトに作られた新様式住宅の総称ということだそうです。1940 年代から 50 年代の建物は、両者の中間ということで「アルトノイバウ」とよばれていますが数は多くありません。戦時中何度も空爆を受けたベルリンでは、多くの建物が損傷を受けていますので市内の住宅の多くはノイバウです。他方、戦火を免れた数少ないアルトバウの建築物は重厚な外観で室内はアールヌーボー調、壁に装飾が施されていることも多く落ち着いた雰囲気です。天井が高いので、冬の長いベルリンでは暖房費がかさみそうですが、あえてアルトバウに好んで入居するドイツ人は結構いました。

ベルリンで内覧した住居は、家具付きもあれば家具なしもありましたが、多数は家具なし。ベルリンの家具なし住居、特にアルトバウの住居は文字通り家の中が何も無いスカスカの状態です。ドイツ人の中にはこういった住居をあえて好み、入居後にスカスカの室内を自ら DIY で自分好みに改修するケースもあると聞きました。また、アルトバウを好む人たちは総じてインテリアにこだわりや好みがあり、住居選びでは自前の家具や調度品などとのマッチングに適した住居を選定します。実際、着任した年の 12 月初旬にドイツ人の自宅にお茶に招かれたことがあります。これがベルリン中心部からほど近くにあった典型的なアルトバウのアパートでした。入口のドアは高さが 2.5m 以上は

あろうかという重厚なドア、室内のリビングダイニングは4辺に凝った模様の装飾（モールディング）が施された高さ3.5mほどの天井で、シャンデリが飾られており、窓は昔ながらの縦に長い大きな窓、床は合板ではなく天然板のフローリングといった内装で、ソファやダイニングセットなどの家具や調度品もアンティーク調の立派なものでした。着任後わずか数か月、まだドイツの生活にも慣れていない時期にドイツ人の立派なアルトバウ住宅に招かれて午後のひと時を過ごし、その場でいただいたシュトーレン（ドイツ伝統のフルーツケーキの一種でクリスマス時期に食されることが多い）の味は今でも印象深く記憶しています。

アルトバウ住宅でのDIYに話を戻しますが、3~4年程度で任地が変わる筆者のような場合、賃借した住居の内装をDIYで改修しているような暇はありませんでしたし、そもそもDIYは自分たちの生活スタイルではありません。また、アルトバウにふさわしい重厚な家具類は値が張って手が出ません。ということで、最終的に選んだのはノイバウの住居、築30年ほどのアパートでした。

アパート入居

アパートの場所は、ベルリン市内南西部のツェーレンドルフ地区です。大使館の所在する市の中心部からは15kmほどに位置し、子供たちの通うインターナショナルスクールともほぼ等距離、周囲は緑豊かで閑静な住宅街でした。アパートは全部で5室という小振りの4階建てで、各部屋はすべて異なる間取り。筆者の部屋は、建物の階段を5~6段上がったオートロックの入り口に入って直ぐの1階で、隣室は歯科医の診療所になっていました。部屋の内部は、メゾネットタイプの地下1階、地上2階の3層構造。入口を入ると、右手が来客用トイレ、正面に6畳ほどのキッチン、その左手に6畳ほどの朝食スペース、そこから1段（約20cm）下りると25~6畳ある間仕切りのないオープンリビングダイニングというのが1階の間取り。吹き抜けの階段を上がった2階が寝室エリアで、それぞれ約12畳、10畳、8畳のベッドルームとバスルーム。地階部分（正確には半地下）にランドリールームと倉庫という間取りでした。さらに、リビングの真下部分はリビングと同じだけの広さの空間がありましたが、天井高は180cmしかなく居室としては使えない中途半端な部屋で、来客時以外はただの空き部屋と化していました。全体の延べ床面積がどのくらいあったかは覚えていませんが、生活空間としては十分な広さが確保されていました。車は、アパート裏庭の外置き駐車スペースに1台分が確保されていました。ちなみに、2台あった車のもう1台は路上駐車でしたが、ベルリンでは規制区域を除けばほとんどの住宅街で路上駐車が可能でした。

個人的な感想ですが、ドイツでは何をすることも無駄が省かれて合理性が重視されるように思われます。アパートの賃貸契約でいえば、室内に何の付帯設備もない家具なしのスカスカなアパートは、付加価値がないということで賃料がかなり安く抑えられて

いたという印象で、パリやロンドンなど同じ欧州地域の家賃相場と比較するとかなり抑えられていたと思います（もちろん、その分家具や家電製品等の調達コストは入居者が負担することになりますが…）。筆者のアパートの場合、上述した広さで月額 1,500 ユーロとかなり低めでした。仮に当該物件が家具付きであれば、家賃はその 20~30%増しというのがベルリンの相場でした。その代わり、共益費はしっかりと徴収されます。特に、冬場の決まった期間（10 月から 4 月）は特定地区の住宅街に温水を供給する地域暖房が導入されていたため、そのコストを含めた共益費が実費として 600 ユーロほどかかっていたと記憶しています。

このアパートには離任まで暮らしました。ベルリン在勤最後の 8 か月は家族を日本に帰しての単身生活でしたが、地下室のある広い空間での一人で暮らし、特に 1 日中暗い冬の時期はあまりにも静かすぎて、薄気味のいいものではありませんでした。

家具調達

賃貸契約が済めば、次にやるべきことは家具類の調達です。廉価で手ごろな家具といえば、世界各都市に展開するスウェーデン発の“IKEA”が有名で、2000 年代以降は日本でも各地で店舗展開がみられますので、ご存じの方も多いでしょう。筆者は、1980 年代前半からモンテリオールなどの海外在勤地で“IKEA”の家具を利用していました。ドイツでも“IKEA”のお世話になりました。ことさら一企業の肩を持つつもりはありませんが、北欧調のモダンでシンプルなデザインと価格の安さ、店頭で購入した組み立て式家具のセットをそのまま自宅に持ち帰ることができる扱いやすさもあって、ドイツでも若い人を中心に人気がありました。

10 月初旬の入居日に合わせて、“IKEA”で調達した大量の家具類が組み立て前の段ボールに入った状態で配達され、同時に運送会社の倉庫に保管しておいた日本からの船荷も到着。段ボール約 100 個分の船荷の整理は家内が担当、筆者はとりあえずベッド 3 台分の組み立てと作業を分担しましたが、結局ベッドは完成せず、その日はマットレスを直接床に敷いて寝るという有り様でした。その週末の日曜日の午前中、いつ終わるとも知れない家具の組み立て作業に集中していたところ、入口の呼び鈴がけたたましく鳴り響いて作業を中断、ドアを開けてみると、そこには上階の住人が立っており、凄い剣幕で、音がうるさいから作業を即刻中止してくれとクレームをつけてきました。（確かに、家具の組み立てでは時に大きな音も出ますが）こちらが、昼間だけの作業だから問題ないのではないかと押し返したところ、「外国人だから知らないだろうが、日曜日には静かに過ごすのがドイツ人の習慣だから、日曜日に大きな音を立てるのは言語道断、生まれたての赤ん坊もいるので甚だ近所迷惑である」との対応。随分と高飛車かつ神経質な人だとは思いましたが、物音を立てていたのは当方でしたし、赤ちゃんのことを持ち出されてはこちらも引き下がるしかありませんでした。ただ、これによってドイツ人の日

常生活の一端を垣間見たような気がして、日曜日に限らず普段から「物音」には気を遣うようになりました。そんなこともあって、家具組み立てのスケジュールは遅延に遅延を重ね、全ての家具組み立てが完了したのは11月も近い初冬の頃でした。

窓が特徴的なドイツの住宅

アパートの内覧時、窓にカーテンレールがないので不動産会社に確認すると、ドイツではカーテンを取り付ける習慣はない、カーテンが必要ななら窓の外枠を傷つけないように配慮して取り付けたらどうか、との反応。それまで、英国や南アで盗難被害に遭っている身としてはいささか耳を疑いましたが、あらためて周囲の住宅を観察してみるとほとんどの住宅は室内が丸見えです。理由はいろいろあるようですが、周囲の日本人に聞いてみると、例えばドイツ人はきれい好きで普段から室内をきれいに片づけているので隠す必要がなく、むしろドイツ人にはきれいに整理整頓された室内を見せる文化があるとか、ドイツ人は太陽の光を室内に取り入れることを好むのでカーテンは余計なものと考えているとか、あるいは防犯意識が日本人に比べて薄いといったことを説明してくれましたが、本当のところはよく分かりません。いずれにしても、当方にとっては他の在勤地での体験もあって窓の目隠しはセキュリティ上必須です。後日、近所のホームセンターで突っ張り棒を買ってきてカーテンを取り付けました。

太陽の光だけでなく、外の空気を取り入れるため頻繁に窓を開けたがるのもドイツ人の特徴です。これは、職場でも子供たちの学校でもそうでしたが、出勤してくるとすぐに室内のすべての窓を開け放ちます。外気温が零下の真冬ですら窓全開です。寒いから閉めてくれと言っても、空気の入替えが大事だと言って譲りません。そのドイツ人の習慣はともかくとして、ドイツの住宅の窓は日本の住宅に比べると非常に優れものでした。ドレーキップと呼ばれる窓で、窓枠の材質がアルミではなく樹脂製で3層ガラスの内開き。部屋の空気の入替えは、窓のハンドルを内側に引いて窓を全開にすれば簡単にできます。窓の上部を内側に10度くらい傾けて斜め開きにすることも可能で、雨の日や真冬にも常時換気が可能です。窓を閉じれば、樹脂製の窓枠と複層ガラスが断熱性と防音性を発揮し、外気や屋外の音をシャットアウトします。この窓のおかげで、外気温が零下10°C以下の日でも室内では半袖、快適な冬を過ごすことができました。ちなみに、ドレーキップ窓は省エネ効果が高いということで、最近では日本でも一部の住宅で取り入れられているようです。

緑豊かなベルリン

今になって思い返してみると、ベルリンは筆者が在勤した9か所の都市の中でも森林や公園の多さでは特筆すべき緑豊かな都市だったと思います。市内中心部にあるティア

ガルテン公園は、ブランデンブルク門から西に広がる巨大な公園で、規模は約 210 ヘクタールと日比谷公園の約 13 倍で、大都市の中心部にある公園としてはロンドンのハイドパークやニューヨークのセントラルパークにも引けを取らない規模です。ハイドパークやセントラルパークが芝生の公園なのに対し、ティアガルテンは公園全体が巨木で覆われており、自然の景観を生かした公園でした。ティアガルテン公園は、日本大使館とは通りを挟んだ真向かいにありましたので、昼休みの散歩にはうってつけでした。

アパートのあったシュテューグリッツ・ツェーレンドルフ区も緑に囲まれた地域で、ベルリン市（12 の行政区で構成）の南西端に位置し、隣接しているのはポツダム会談で有名なポツダム市です。アパート裏庭の駐車場には、高さが 20m 近いカスタンニエン（セイヨウトチノキ）が生えていましたが、近隣でも巨木の生い茂る住宅が多くありました。アパートに面した通りは、石畳が敷かれた生活道路で交通量は少なく、両サイドは路上駐車した近隣住人の車で一杯でしたが、歩道には等間隔で街路樹が植えられており、住宅街全体が緑で覆われているような閑静な雰囲気でした。また、アパートから 12~3 分も歩けば、一帯にいくつもの湖が点在する森林が広がっており、天気の良い日の週末にはクルメランケゼー（ゼー：see は湖）やグリュエネヴァルト（緑の森）ゼー周辺の森林でマイナスイオンを浴びることを楽しみの一つとしていましたが、こんな日常の過ごし方をできたのもベルリンならではの恩恵だったかも知れません。

つづく

（公財）栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人（略歴）

1977 年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の 9 公館で計 29 年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に 2019 年 3 月退官。同年 5 月より現職。